

## 都市横浜の出版文化

### Yokohama's Memory の面白さ

文部省の生涯学習審議会（当時）は、昨年11月、「新しい情報通信技術を活用した生涯学習の推進方策について～情報化で広がる生涯学習の展望～」を答申しました。

文中、図書館に関する項目のひとつに、「『地域の情報拠点』としての機能の飛躍的な拡大」が挙げられています。インターネットなどの情報通信技術を活用することにより、「地域への情報提供」に加え、「地域からの情報発信」という機能を持つことができるようになるとし、「紙媒体等による資料・情報と、電子化された資料・情報とを有機的に連携させることにより、図書館全体として行われる必要があります」と指摘しています。

Yokohama's Memory は、横浜市立図書館が都市横浜の記憶装置として、所蔵資料のアピールを目的に展開をしている事業です。インターネット上での公開、絵葉書の発行、展示会の開催、以上三つのメニューで進めています。

Yokohama's Memory の蓄積は未だ断片ではありますが、既刊のシリーズにより、都市横浜の出版文化の一端をご紹介します。

#### § 1 文明開化期の東海道を描いた絵師：三代広重

18世紀末から19世紀中ごろにかけ、文化の大衆化が進み、行動する文化旅が人びとに親しまれるようになりました。さらに、識字率の向上、出版文化の隆盛とも相まって、名所めぐりのガイドブックとして名所図会が編纂されるとともに、十返舎一九は滑稽本『東海道中膝栗毛』を著し、初代広重は「東海道五十三次」のシリーズにより、人びとの旅情を誘いました<sup>1</sup>。

Yokohama's Memory 集では、「描かれた東海道《神奈川・保土ヶ谷・戸塚》」をテーマに、現横浜地域の3宿場を題材とした浮世絵を取り上げました。このうち三代広重による1875年（明治8）8月の『東海名所改正道中記 六 境木の立場 程ヶ谷 戸

塚迄二り九丁』（41号<sup>2</sup>）は、文明開化期らしく坂を上る人力車や、松の木に架けられた電線が描かれています。



横浜の編年史として、最初の出版となる『横浜沿革誌』<sup>3</sup>の明治4年の項につきのような記述があります。一月、横浜より川崎・藤沢の間に人力車営業を創む（当時何地より何地迄と区域を定め、許可を受く）、一人乗は車台に椅子を付し、二人乗、或は四、五人乗あり、二人乗以上は四輪車にして、車台の四隅に柱を建て、之れに横木を架し、天井及左右に布を張り、車の前後に幕を下げ、之れより出入、以下略。

また、『明治事物起原』には、「（明治六）年十月また、本邦始めて電線網を全国に張る時代には、往還の並木の枝を利用し、直ちにそれへ碍子を取り付けて間に合はせし例も多かりし」と書き留められています<sup>4</sup>。

文献資料に記された歴史のひとつを、一枚の浮世絵から読みとることができます。

<sup>2</sup> 『』に囲まれた資料名につづく号表記は図版を掲載している本誌の号数を示し、丸数字は絵葉書のシリーズ番号を指します。

<sup>3</sup> 太田久好，1892年7月，復刻版：石井光太郎校訂，有隣堂，1970年6月，p.88，横浜開港から1891年（明治24）までの横浜の沿革を記述。

<sup>4</sup> 石井研堂『明治事物起原』5、ちくま学芸文庫、1997年9月、pp.059-060。

<sup>1</sup> 竹内誠「庶民文化のなかの江戸」（『日本の近世』第14巻，中央公論社，1993年9月）

## § 2 横浜浮世絵の第一人者：五雲亭貞秀

横浜開港にともない、芝生村（現：西区内）中の東海道から波止場に至る横浜道が整備されました。開港の翌年の横浜道を空からパノラマ写真の如く描いた浮世絵が『東海道名所之内横浜風景』（Yokohama's Memory 集）です。横8枚のうち左6枚に東海道から居留地までが、右2枚には続けて本牧の鼻までが描かれています。絵師は五雲亭貞秀、その描写の正確さには定評があり、神奈川県立歴史博物館が開催した展覧会（1997年）では、「空とぶ絵師」と称されました。開港地の風俗を描いた横浜浮世絵の第一人者とも目され、『神名川横浜新開港図』（Yokohama's Memory 集）は、横浜浮世絵の最初期の作品です。貞秀の特色は、絵を描くことにとどまらず、文章もものしたことにあります。開港期の案内記として資料的価値も高い『横浜開港見聞誌』<sup>5</sup>（36号）が代表作です。見聞誌には、日本人町の様子から居留地の外国人の姿、そして、「五ヶ国の異州より渡来る銅板、石板にて見る物にして、其文八又漸にきく処」（後編二編、序文）による外国人の風俗が記録されています。後編の初編には、外国人の親子が本に読みふけている光景（下図、Yokohama's Memory 集）を見ることができます。



描かれた外国人のなかには、「亜墨利加三十三番之館主ウエンリイト屋敷内を馬乗之図此馬具八常に多く見へぬ物なれば写して是に出すなり」と名前が記されている人物もいます。「ウエンリイト」ことヴァンリードも横浜の出版文化を語る際に欠かせない人物です。

<sup>5</sup> 6冊（1862年前編3冊、1865年後編3冊）、復刻版：名著刊行会、1979年、翻刻：『日本近代思想大系』第17巻、岩波書店、1989年6月、所収）

「社会派・良心派のジャーナリスト」<sup>6</sup>として、英会話テキスト『商用会話』を開港の翌々年1861年に出版、1868年には、「実地の見聞や取材、諸新聞の記事を素材として、時局柄戊辰戦争の報道を中心に、横浜や国内各地、海外の最新情報を平易な表現で伝えた」<sup>7</sup>『横浜新報もしほ草』（38号）を創刊しました。

## § 3 明治文化の先駆者：岸田吟香

もしほ草の編集を日本人として担当した岸田吟香は、麗子像で名高い岸田劉生の父、明治文化の先駆者として、その名を今に残しています。

岸田吟香が来浜するきっかけとなったのは己の眼病のゆえです。治療のため、当時評判の高かったアメリカ人宣教医ヘボンのもとに通いましたが、このことが『和英語林集成』の刊行（1867年）につながります。『和英語林集成』は序文によると、ヘボンの8年間にわたる苦心のたまものであり、「外国人のための日本語辞典として編纂されたものであるが、わが国では和英辞典として広く利用され、その要望に応じて、以後多くの版を重ね」<sup>8</sup>ました。吟香は、印刷のため、ヘボンに同行して上海へも渡り（1866年）、日本語部分の版下を作成しています。

吟香の上海時代を含めた日記を今日読むことができます。1866年の記述には、8月15日（陰曆）に高橋由一（明治初期の洋画家）と「のげの梅本で一盃のむ」<sup>9</sup>とあります。また、上海時代の日記には、「はやくかへつて、あつさりした物で、一盃のみたいもんだ。ちつとたかいけれども梅本にしよう。うちがいゝから」とも書かれています。野毛の梅本は、明治初年の横浜商人315人の番付『大港光商君』にもその名がみえる料理屋です。

## § 4 横浜・野毛のマルチ出版者：尾崎富五郎

『大港光商君』<sup>10</sup>の出版者が尾崎富五郎、欄外には「只、買物案内之為、甲乙更二無之、次第不同、御用

<sup>6</sup> 福永郁雄「ヴァンリード」（『横浜の本と文化』別冊、横浜市中央図書館、1994年3月、p.25）

<sup>7</sup> 佐藤孝「近代的新聞の誕生」（『横浜の本と文化』横浜市中央図書館、1994年3月、p.185.）

<sup>8</sup> 小玉敏子「語学書」（『横浜の本と文化』p.484.）

<sup>9</sup> 翻刻：『社会及国家』1931年5月号、一匡社、p.128

<sup>10</sup> 復刻：『横浜史料 開港七十年記念』横浜市、1928年6月、所収。

捨可被下候、是二もれし八、後へんにいたし申候、五百枚限、禁売買、錦誠堂蔵版」<sup>11</sup>と記されています。

岸田吟香は、「蒸気 本丁二 岸田屋銀治」と紹介されています。「蒸気」とは蒸気船営業のこと、これは、上海から帰朝後、吟香が横浜・江戸間の渡航業に携わったためです。1868年の吟香発行と推測される『渡航新聞のりあひばなし』初編・二編が今日に伝わります。

尾崎富五郎の「製図」、岸田吟香の「校正」による地図が1870年の『新鑄横浜全図』（Yokohama's Memory 集、37号）です。刊記には、横浜の変遷の速さを「横浜ノ地日々々々ニ盛ニシテ山林汚地忽然変ジテ平地坦途トナリ」と記録しています。同図の余白部分には「在港外国人名抄録」が掲載され、「ヘッポーン」や「ヴエンリード」の名前も見えます。「ピアト」は写真家ベアト、その作品<sup>12</sup>は日本人の手になる浮世絵と同様、横浜を記録した優れたメディアです。

先述の高橋由一は、洋画を学ぶために来浜し、岸田吟香の紹介でヘッポーンを訪ねましたが、はかばかしくないため、別の友人の紹介により、ワーグマンに面会を試みます。が、誤って隣のベアトを訪問してしまい、ベアトに案内されてようやくワーグマンに会うことができたことが「高橋由一履歴」<sup>13</sup>に記されています。

ワーグマンは、『絵入りロンドン=ニュース』の特派画家兼通信員として1861年来日、1862年春には風刺漫画雑誌『ジャパン=パンチ』を創刊しています。右図（Yokohama's Memory 集）は、『絵入りロンドン=ニュース』（1865年7月15日号）に掲載された横浜のはねつき遊びの様です。

尾崎は地図のほかにも、語学書や往来物を出版していますが、紙のカタログ『諸国紙名録』は紙の博物館により複製され、東京の有名店の名簿『商業取組評』もその一部が複製<sup>14</sup>されています。尾崎の仕事に対する評価の一証左といえましょう。

尾崎は1893年にその生涯を閉じます。その数年後、尾崎自身が出版も販売もした浮世絵に取って代わ

り、絵葉書が名所案内の代表的なメディアとして登場します。絵葉書による明治後期から関東大震災を経て復興に至るまでの街並みの変遷は、Yokohama's Memory 集（39号）をご覧ください。



## § 5 図書館と横浜資料

『大港光商君』や『商業取組評』の如く、名鑑は尾崎富五郎の特徴的な出版物です。そのひとつ『横浜商名鑑』は、尾崎の出版物『英語手引草』の巻末に広告が掲載され<sup>15</sup>、『横浜史談会主催横浜史料展覧会出品目録』（1915年7月）により、その存在が確認できますが、今日、図書館をはじめ、関連機関の目録にその書名を見出すことはできません。横浜を襲った関東大震災や戦災により喪失した文化遺産のひとつといえるでしょう。

これとは反対に、先述の『横浜開港見聞誌』を、弘前の図書館が所蔵しています。地元にお住まいの方が寄贈された本書には、「明治十九年三月吉日買求」と記されています。「本」の拡がりの一端がうかがえます。

横浜市中心図書館は、1921年の創立以来、横浜資料を大きな柱のひとつとして収集してきましたが、最大の特色は、《横浜》を調べる際に必要な周辺資料も豊富に揃えていることにあります。横浜の都市形成を出版文化からたどることを可能にする資料群が、みなさまのご利用をお待ちしています。

横浜市立図書館ホームページアドレス

<http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/library/>

絵葉書 Yokohama's Memory 販売先

市庁舎 1階市民情報センター、ほか一部の市内書店。

<sup>11</sup> 石井光太郎「佐野富の番付」（『横浜の本と文化』、pp.068-071、商人の職種、姓名を活字化して収録）

<sup>12</sup> 『F. ベアト幕末日本写真集』横浜開港資料館、1987年2月、ほか。

<sup>13</sup> 神奈川県立近代美術館編『神奈川県美術風土記』高橋由一篇、有隣堂、1973年3月、pp.264-265

<sup>14</sup> 『東京雷名商家番付集』太平書屋、1994年9月

<sup>15</sup> 石橋正子「錦誠堂尾崎富五郎出版目録（稿）」（『出版研究』23号、1993年）